神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

中國小説史略考證 第十七

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2001-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/967

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中國小說史略考證 第十七

中島長文

第十七篇　明之神魔小說（中）

1 又有一百回本『西遊記』、以至乃愈不可拔也　一六一一

寫印本『大略』一二、明之歷史與神異小說云、至于取史上之事或一人、而又不循舊文、出意虛造、以奇幻之思成神異之談、則至明始有鉅製。其魁傑曰西遊記。／世多謂西遊記爲元道士邱處機作者非也。李志常撰長春眞人西遊記二卷、記處機西行事、今尙存、與此名同而書別。山陽丁晏據康熙初之淮安府志藝文書目、謂此爲其鄉嘉靖中歲貢生、官長興縣丞吳承恩所作、且謂記中所述大學士翰林院中書科、錦衣衛、兵馬司、司禮監、皆明代官制、又多淮郡方言（冷廬雜識）、則比書爲山陽吳承恩撰也。

『大略』鉛印本と『史略』初版との異同は、鉛印本には「『道藏』中」がなく、「世遂以爲一書」を「遂得相溷」に作り、「不可拔也」を「不可破也」に作るもののみ。

「小說的歷史的變遷」第五講「明小說之兩大主潮」、承第一六篇1所引云、（一）『西遊記』『西遊記』世人多以爲是元朝的道士邱長春做的、其實不然。邱長春自己另有『西遊記』三卷、是紀行、今尙存『道藏』中。惟因書名一樣、人們遂誤以爲是一種。加以清初刻『西遊記』小說者、又取虞集所作的「長春眞人西遊記序」冠其首、人更信這『西遊記』是邱長春所做的了。――實則做這『西遊記』者、乃是江蘇山陽人吳承恩。此見于明時所修的『淮安府志』、但到清代修志却又把這記載删去了。

「長春眞人西遊記」を「三卷」とするのは筆誤か。正しくは「二卷」である。

『小說舊聞鈔』「西遊記」引『山陽志遺』四、其魯迅案語云、此與李志常所記之『長春眞人西遊記』自是二書、吳蓋未見李志常記、故有此說。芥子園刻本『西遊記』小說、輙從虞集『道園集』取「長春眞人西遊記序」冠其首、世人遂愈不能辨矣。

李志常撰『長春眞人西遊記』二卷は、『史略』の言うとおり、明正統年間に刊行された所謂『正統道藏』正一部の末卷に收錄されており、又『道藏輯要』胃集には一卷本が入っている。その他道光年間の指海、連筠簃叢書が收錄し、近くは王國維の校注に繫るテキストが民國十五年『蒙古史料校注四種』の一として刊行、のち『海寧王忠慤公遺書』に收錄、民國五七年の『王國維先生全集』十二册（文華出版公司）にも見ることができる。虞集の撰にかかる「長春眞人西遊記序」は存在しない。清初の刻の『西遊記』とは汪象旭と黃周星による『西遊證道書』一百回で、原刊本は日本の內閣文庫に藏する。『史略』の記述からして魯迅はこの書もそれに附された所謂虞集の序も見ていない。書は「西陵殘夢道人汪澹漪箋評、鍾山半非居士黃笑蒼印正」と題する。孫楷第が『中國通俗小說書目』に言うごとく清一代を通じても稀覯の書であったのだろう。所謂虞集の序は「長春眞人西遊記序」を取ったのではなく、黃周星らによ

る偽托である。なお『山陽志遺』の案語に言う芥子園本は、『西遊眞詮』であってこれには虞集の序はない。（拙譯『中國小說史略』2第一七編譯注1參照。一九九七年平凡社　東洋文庫）

所謂虞集『西遊記』序云、余浮湛史館、鹿鹿丹鉛。一日有衡岳紫瓊道人持老友危敬夫手札來謁、余與流連浹月、道人將歸、乃出一帙示余曰、此國初邱長春眞君所纂西遊記也。敢乞公一序以傳。余受而讀之。見書中所載、乃唐玄奘法師取經事跡。夫取經不始於唐也、自漢迄梁咸有之、而唐之玄奘爲尤著。其所爲跋涉險遠、經歷艱難、太宗聖教一序、言之已悉、無俟後人贅陳。而余竊窺眞君之旨、所言者在玄奘、而意實不在玄奘、所紀者在取經、而志實不在取經、特假此以喩大道耳。猿馬金木、乃吾身自具之陰陽、鬼魅妖邪、亦人世應有之魔障。雖其書離奇浩汗、亡慮數十萬言、而大要可以一言蔽之、曰收放心而已。蓋吾人作魔成佛、皆由此心。此心放、則爲妄心。妄心一起、則能作魔、其縱横變化、無所不至。如心猿之稱王稱聖而鬧天宮是也。此心收、則爲眞心、眞心一見、則能滅魔、其縱横變化、亦無所至。如心猿之降妖縛怪而證佛果是也。然則同一心也、放之則其害如彼、收之則其功如此。其神妙非有加於前、而魔與佛則異矣。故學者但患放心之難收、不患正果之難就。眞君之諄諄覺世、其大旨寧能外此哉。按眞君在太祖時、曾遣侍臣劉仲祿萬里訪迎、以野服承聖問、促膝論道、一時大被寵眷、有玄風慶會錄載之詳矣。歷朝以來、屢加封號、其所著詩詞甚富、無一非見道之言、然未有如是書之鴻肆而靈幻者、宜紫瓊道人之寶爲枕秘也。乃俗儒不察、或等之齊諧稗乘之流。井蛙夏蟲、何足深論。夫大易皆取象之文、南華多寓言之蘊、所由來尚矣。昔之善讀書者、聆周興嗣性靜心動之句而獲長生、誦陸士衡山暉澤媚之詞而悟大道、又何況是書之深切著明者哉。　　天曆己巳翰林學士臨川邵庵虞集撰古本小說集成本

笑蒼子「西游證道書跋」云、笑蒼子與澹漪子訂交有年、未嘗共事筆墨也。單閼維夏、始邀過蜩寄、出大略堂西游古本、屬其評正。笑蒼子於是是書固童而習之者、因受讀而嘆曰、古本之較俗本有三善焉。俗本遺却唐僧出世四難、一也。有

意續凫就鶴、半用俚詞塡湊、二也。篇中多金陵方言、三也。而古本應有者有、應無者無。令人一覽了然、豈非文壇快事乎。同上

2 然至清乾隆末、以至則第志俗說而已　　一六一十七

寫印本『大略』は前節參照。鉛印本は「至清乾隆末」より「惟尙不知作者爲何人。而」までがなく「尤爲人所樂道」の「尤爲」なく、「故是後山陽人如丁晏」の「是後」なく、「已皆探索舊志」の「探索」を「根據」に作り、「……爲吳承恩矣」の「矣」字なく、また「則第志俗說而已」の「第」字がない。初版ですべて現行の如くになる。

錢大昕「跋長春眞人西遊記」云、『長春眞人西遊記』二卷、其弟子李志常所述、於西域道里風俗頗足資考證、而世鮮傳本、予始於道藏鈔得之。村俗小說有『唐三藏西遊演義』、乃明人所作、蕭山毛大可據『輟耕錄』以爲出邱處機之手、眞郢書燕說矣。『潛研堂集』二九、上海古籍出版社本

紀昀之說　丁晏『石亭記事續編』の魯迅案語に全文が見える。後出。

魯迅給胡適之書簡二二〇八一四云、適之先生：關于『西遊記』作者事迹的材料、現在錄奉五紙、可以不必寄還。『山陽志遺』末段論斷甚誤、大約吳山夫未見長春眞人『西遊記』也。／昨日偶在直隸官書局買『曲苑』一部上海古書流通處石印、內有焦循『劇說』引『茶餘客話』說『西遊記』作者事、亦與『山陽志遺』所記略同。從前曾見商務館排印之『茶餘客話』、不記有此一條、當是節本、其足本在『小方壺齋叢書』中、然而舍間無之〔後略、下文見拙編第十六第6〕全集一一。文中『茶餘客話』の足本が『小方壺齋叢書』中にあることを言う點については、すでに全集注がその誤りであることを訂して當該叢書には收錄しないと言う。

『小說舊聞鈔』『西遊記』云、（『石亭記事續編「淮陰脞錄自序」）……『癸辛雜識』載龔聖予「水滸三十六贊」並序、阮

厝山『淮故』稱龔高士畫宋江等三十六像、吳承恩爲之贊、大誤、贊乃高士所自爲也。承恩、明嘉靖時歲貢生、所著有『西遊記』、載『康熙舊志』藝文目。錢竹汀『潛研堂集』謂『長春眞人西遊記』二卷、別自爲書、小說『西遊演義』乃明人所作、而不知爲吾鄉吳承恩作也……。

（『石亭記事續編』「書西遊記後」）『潛研堂集』「跋西遊記」云、「長春眞人西遊記二卷、其弟子李志常所述、於西域道里風俗、頗足資考證、而世鮮傳本、予始於道藏鈔得之。小說西遊演義乃明人所作、蕭山毛大可據輟耕錄以爲出邱處機之手、眞鄙書燕說矣。」晏案錢氏謂明人作、甚是。記中如祭賽國之錦衣衛、朱紫國之禮監、滅法國之東城兵馬司、唐太宗之大學士、翰林院、中書科、皆明代官制。邱眞人乃元初人、安得有此官、其爲明人作無疑也。及考吾郡康熙初舊志藝文書目、吳承恩下有『西遊記』一種。承恩字汝忠、吾鄉人、明嘉靖中歲貢生、官長興縣丞。『舊志』文苑傳稱「承恩性慧而多敏、博極羣書、復善諧劇、所著雜記幾種、名震一時。」『西遊記』即其一也。今記中多吾鄉方言、足徵其爲淮人作。『西遊』雖虞初之流、然膾炙人口、其推衍五行、頗契道家之旨、故特表而出之、以見吾鄉之小說家、尚有明金丹奧旨者、豈第秋夫之鍼鬼、瞽仙之精算哉？且使別於眞人之記、各自爲書、錢氏之說、得此證而益明矣。

案：『西遊記』中多明代官制、故非邱長春作、紀昀已於『如是我聞』卷三假客問乩仙語以發之矣。其說云、

『吳雲巖家扶乩、其仙亦云邱長春。一客問曰、「西遊記果仙師所作、以演金丹奧旨乎？」批曰、「然。」又問、「仙師書作於元初、其中祭賽國之錦衣衛、朱紫國之司禮監、滅法國之東城兵馬司、唐太宗之大學士、翰林院、中書科、皆同明制、何也。」乩忽不動、再問之不復答、知已詞窮而遁矣。然則西遊記爲明人依託無疑也。』

又云、（『山陽志遺』四）嘉靖中、吳貢生承恩字汝忠、號射陽山人、吾淮才士也。英敏博洽、凡一時金石碑版嘏祝贈送之詞、多出其手、薦紳臺閣諸公、皆倩爲捉刀人。顧數奇不偶、僅以歲貢官長興縣丞。貧老乏嗣、遺稿多散佚失傳。邱

司徒正綱收拾殘缺、得其友人張清溪、馬竹泉所手錄、又益之以鄉人所藏、分爲四卷、刻之、名曰『射陽存稿』、（又有『續稿』一卷）五嶽山人陳文燭爲之序。其略云、「陳子守淮安時、長興徐子與過淮。往汝忠丞長興、與子與善、三人者呼酒韓侯祠內、酒酣、論文論詩不倦也。汝忠謂文自六經後、惟漢魏爲近古、詩自三百篇後、惟唐人爲近古。近時學者、徒謝朝華而不知畜多識、去陳言而不知漱芳潤、卽欲敷文陳詩、難矣。徐先生與予深韙其言。今觀汝忠之作、緣情而綺麗、體物而瀏亮、其詞微而顯、其旨博而深、收百代之闕文、採千載之遺韻、沈辭淵深、浮藻雲駿、張文潛以後、一人而已。」其推許之者可謂至極。讀其遺集、實吾郡有明一代之冠。惜其書刊板不存。予初得一抄本、紙墨已渝敝、後陸續收得刻本四卷、並續集一卷。余盡登其詩入『山陽耆舊集』。擇其傑出者、各體載一二首於此、以志瓣香之意云。（從略。詩歌十一首を引く）『天啓舊志』列先生爲近代文苑之首、云、「性敏而多慧、博極羣書、爲詩文下筆立成、復善諧謔、所著雜記幾種、名震一時。」初不知雜記爲何等書、及閱淮賢文目、載『西遊記』爲先生著。攷『西遊記』舊稱爲證道書、謂其合於金丹大旨、元虞道園有序、稱此書係國初邱長春眞人所撰。而郡志謂出先生手、天啓時去先生未遠、其言必有所本。意長春初有此記、至先生乃爲之通俗演義、如『三國志』本陳壽、而演義則稱羅貫中也。書中多吾鄉方言、其出淮人手無疑。或云有『後西遊記』、爲射陽先生撰。この引用に附された魯迅の案語は已に本篇1に見える。

阮葵生の『茶餘客話』の記事は、焦循『劇說』の引く所によって讀んだ。（前掲書簡參照）

焦循『劇說』卷五云、茶餘客話云、舊志稱吳射陽性敏多慧、爲詩文下筆立成、復善諧謔。所著雜記幾種、名震一時。今不知雜記爲何名、惟淮賢文目載、先生撰西遊通俗演義、是書明季始大行、里巷細人皆樂道之。而前此亦未之有聞。世稱爲證道書、有合金丹大旨。按射陽去修志時不遠、未必以世俗通行之小說移易姓氏、其說當有所據。觀其中方言俚語、皆淮之鄉音街談。巷弄市井童孺所習聞、而他方有不盡然者、其出淮人之手、尤無疑。然此特射陽游戲之筆、聊資

村翁童子之笑謔、必求得修煉秘訣、亦鑿矣。一九五七年古典文學出版社排印本。

『茶餘客話』の通行本は十二卷の節本でこの記事を載せない。明清筆記叢刊本が二十二卷補遺一卷で（全集注は三十卷とするが、諸書目に三十卷本は見えない。元三十卷ということか）、その二十一卷にこの記事が見える。いま近邊で見ることができないのでとりあえず趙氏『中國小說史略傍證』七七頁より引く。

阮葵生『茶餘客話』二一云、金漳山先生令山陽、修邑志、以吳射陽撰西遊記事欲入志。按舊志稱、射陽性敏多慧、爲詩文下筆立成、復善諧謔。著雜記數種。惜未注雜記書名、惟淮賢文目載射陽撰西遊記通俗演義。是書明季始大行、里巷細人皆樂道之、而前此亦未之有聞。世乃稱爲證道之書、批評穿鑿、謂吻合金丹大旨。前冠以虞道園一序、而尊爲長春眞人秘本、亦作偽可嗤者矣。按明郡志謂出射陽手、射陽去修志時未遠、豈能以世俗通行之元人小說攘列己名。或長春初有此記、射陽因而衍義、極誕幻詭變之觀耳、亦如左氏之有列國志、三國之有演義。觀其中方言俚語、皆淮上之鄉音街談、巷弄市井婦孺皆解、而他方人讀之不盡然、是則出淮人之手無疑。然射陽才士、此成其少年狡獪、遊戲三昧、亦未可知。要不過爲林翁塾童笑資。必求得修煉秘訣、則夢中說夢。以之入志、可無庸也。又『明清小說資料選編』（一九八九・齊魯書社）、『西遊記研究資料』（一九九〇・上海古籍出版社）等に見える。

『史略』の『西遊記』が山陽の吳承恩の作であることの發見を述べた部分は、清人の生卒年代を考慮していないよう見える所がある。しかし魯迅自身はその先後關係は承知していたようだ。胡適「西遊記考證」五には焦循『劇說』に引く阮葵生『茶餘客話』の記述を引用したあと「周先生（周豫才つまり魯迅）考出『茶餘客話』此條繫根據吳玉搢的『山陽志遺』卷四的」と言い、その後『山陽志遺』を引く。これらの資料はすでに述べたように魯迅が提供したものである。ここに關連する清人の資料をその生卒年代に並べかえるとすれば、吳玉搢（一六九八―一七七三）『山陽志

遺』、阮葵生（一七二七―一七八五）『茶餘客話』、丁晏（一七九四―一八七五）の『石亭紀事』、陸以湉『冷廬雑識』（『小説舊聞鈔』引）となる。そして『西遊記』に對する見方こそそれぞれに違うけれども、話題として記述されている事柄は、たとえば丘長春の作とか、金丹の主旨に一致するとかは同じものが多く、大抵が先立つ記述を襲うか、承けて自分の意見を加えただけのもので、大きな發明發掘はない。殊にすべての書物に共通する『西遊記』には淮安方言が多いという、作者確定の大きな要素としている事柄についても、最初に言い出した吳玉搢の言説を吟味なく受賣りしただけのように思われる。それらは通じて用例を全く擧げない。そして又吳玉搢の説も、黄周星の「西遊證道跋」に言う「三善」の一つ「篇中金陵方言多し」と言う主張を、「淮安方言」にすり替えたに過ぎないのではないか。

『小説舊聞鈔』『西遊記』云、（『冷廬雑識』四）『西遊記』推衍五行之旨、視他演義書爲勝。相傳出元邱眞人處機之手。山陽丁儉卿舍人晏據淮安府康熙初舊志藝文書目、謂是其鄉嘉靖中歲貢生官長興縣丞吳承恩所作。且謂記中所述大學士、翰林院、中書科、錦衣衛、兵馬司、司禮監、皆明代官制、又多淮郡方言、此足以正俗傳之訛。（邱氏自有『西遊記』見『道藏』。）

3 吳承恩字汝忠、以至亦愈少矣　一六一―三

この節に該當する記述は『大略』寫印本にはない。寫印本の時點では、まだ吳承恩の經歷が分明ではなかったのだろう。『大略』鉛印本には「余未詳」「（陳文燭序語）」の記述がなく、初版では『西遊記』を『游西記』と誤植し、「余未詳」をすぐその後に續け、陳文燭の序語の前の「其」字がない。合訂再版で現行の如くになった。當時は『射陽存稿』そのものを見ることができなかったから、魯迅は陳文燭の序語を『山陽志遺』によって引いたと考えられるが、そこでの引用文では兩句にそれぞれ「其」字が附いて「其詞微而顯、其旨博而深」となっている。

前條と本條のもとになる資料はその殆どが『小說舊聞鈔』に收錄されているが、前條で引用した胡適宛書簡に明らかなように、これらは五紙に抄寫されて胡適の「西遊記考證」のために提供された（民國十二年二月四日）。その第六章作者吳承恩に關する記述は大半が魯迅が提供した資料によっている。胡適はそれらに據って吳承恩の生卒年を「他大概生于正德之末（約一五二〇）、死于萬曆之初（約一五八〇）。」と推定している。但し「考證」附錄につけた董作賓「續〝西遊記考證〟」の後記二（民十二・二）では「約萬曆七八年（約一五八〇）吳承恩死、……生時當在弘治正德之間（約一五〇五）。」と訂正し、翌民國十三年十二月には、『楚州叢書』に入った『射陽文存』一卷を讀んで「大概吳承恩生于一五〇〇年左右、死于一五八〇年左右。」（「讀吳承恩『射陽文存』」）とした。さらに一九三〇年、故宮で『射陽存稿』四卷が發見され『故宮周刊』に掲載されると、「此可考見吳承恩死在萬曆十年（一五八二）」（同上『胡適文存』三集卷六）と訂正した。これ以後趙景深「西遊記作者吳承恩年譜」（一九三七年『小說閑話』、のち一九八〇年『中國小說叢考』所收）なども生卒を「一五〇〇—一五八二」とする。『史略』が胡適と同じ表現で「萬曆初卒—一五八〇」とするのはともかく、生年を「約一五一〇」としたのは如何なる資料によって如何に考えたのか未詳。

『小說舊聞鈔』『西遊記』云、（『天啓淮安府志』十六人物志二近代文苑）吳承恩性敏而多慧、博極羣書、爲詩文下筆立成、清雅流麗、有秦少游之風。復善諧劇、所著雜記幾種、名震一時。數奇、竟以明經授縣貳、未久、恥折腰、遂拂袖而歸、放浪詩酒、卒。有文集存於家、丘少司徒滙而刻之。

（『天啓淮安府志』十九藝文志一淮賢文目）吳承恩『射陽集』四册□卷、『春秋列傳序』、『西遊記』。

案：『康熙淮安府志』卷十一文苑傳及卷十二藝文志所載吳承恩事迹及著作、並與『天啓淮安府志』同。

（『同治山陽縣志』十二人物二）吳承恩字汝忠、號射陽山人、工書、嘉靖中歲貢生、官長興縣丞。英敏博洽、爲世所推、一時金石之文、多出其手。家貧無子、遺稿多散失、邑人邱正綱收拾殘缺、分爲四卷、刊布於世、太守陳文燭爲之序、名曰『射陽存稿』。又『續稿』一卷、蓋存其什一云。

案：同志卷五職官門明太守條下云、「黃國華、隆慶二年任。陳文燭、字玉叔、沔陽人、進士、隆慶初任。邵元哲、萬曆初任。」

（『同治山陽縣志』十八藝文）吳承恩『射陽存稿』四卷、『續稿』一卷。

案：『西遊記』不著於錄自此始、『光緒淮安府志』卷二十八人物志、卷三十八藝文志所載、並與此同。

『同治山陽縣志』に言う。『射陽存稿』四卷はその後故宮の遺物の中から發見されて、最初『故宮周刊』に連載公表され、一九三〇年に故宮博物院圖書館から排印線裝二冊として發刊された。そこには陳文燭の序が見られる。但し『存稿』のみで『續稿』の方は未發見である。また吳玉搢が吳承恩の詩のすべてを收錄したと言う『山陽耆舊集』については全集注が「未見」という。なお故宮博物院刊『射陽存稿』は當然魯迅の架藏が考えられるが、不思議なことに『日記』も『書帳』にも記錄がなく、『魯迅藏書目錄』も著錄しない。『射陽存稿』の近刊には補遺や附錄を加えた『吳承恩詩文集箋校』（一九九一年上海古籍出版社）がある。

吳承恩著者說　前節2に見えるように清朝の吳玉搢、阮葵生、丁晏らによって發見され、民國には魯迅、胡適によって再發掘されて以後、中國では定說になった觀があり、人民共和國成立後も殆どこの說をとる。しかし吳承恩と『西遊記』を結ぶものは『天啓淮安府志』の記述のみであり、『射陽存稿』發見ののちも確實に吳承恩と小說『西遊記』を關係づける證據は見つかっていない。あるのはすべて傍證のみである。趙景深が「『西遊記』作者吳承恩年譜」

（一九三五、『小說閑話』。のち『中國小說叢考』所收）で擧げる『禹鼎志』が志怪である點では『西游記』と類緣性があるけれども、この文言小說はすでに失われて實際の中味は知りようがない。しかもその彼自身の序はとりようによっては作者說にとって否定的要素ともなりかねない。その序に言う。「余幼年卽好奇聞、在童子社學時、每偷市野言稗史、懼爲父師訶奪、私求隱處讀之、比長好益甚、聞益奇、迨於旣壯、旁求曲致、幾貯滿胷中矣。嘗愛唐人如牛奇章段柯古輩所著傳記、善模寫物情、每欲作一書對之。嬾未暇也。轉嬾轉忘、胷中之貯者消盡。獨此十數事、磊塊尙存、日與嬾戰、幸而勝焉。於是吾書始成、因竊自笑、斯蓋恠求余、非余求恠也。彼老洪竭澤而漁、積爲工課、亦奚取奇情哉。雖然吾書名爲志怪、盖不專明鬼、時紀人間變異、亦微有鑒戒寓焉。昔禹受貢金、寫形魑魅、欲使民違弗若。讀玆編者、儻慢然易慮、庶幾哉有夏氏之遺乎。國史非余敢議、野史氏其何讓焉、作禹鼎志。」（『射陽存稿』二）確かに幼い時から稗史野言が好きで、成長してからも小說への嗜好が衰えなかったことは分る。しかし胸中に滿ちていた怪奇なことがらも次第に忘れ去り、後に殘った十數事のみを書き記して書物とすると言うのだから、その書も大部のものではなく、ごく薄册であったにちがいない。そのことといくら白話小說とは言え、世德堂本『西遊記』のような空想力に滿ち、それなりの結構を持った大部の小說とを對比してみれば、『禹鼎志』と『西遊記』を繫ぐ絲は見出しにくい。いずれにしろ『禹鼎志』を見ることができない以上決定的なことは言えない。

また魯迅がここで同治以後の府志が、吳承恩の爲人に關する評語「諧劇を善くし、雜記を著わす」（天啓府志）を刪ったことを强調するのは、「諧劇を含む雜記」＝小說『西遊記』と吳承恩との關係を證明するためのものである。しかし府志の寥々たる數語を證據として强調しなければならないことは、逆に言えば證據としての薄弱性をも示しているのである。そしてその他の傍證、たとえば吳玉搢が『山陽志遺』で「書中多吾鄉方言、其出淮人手無疑。」と言うが、

彼は一例もその證として擧げていない。管見ではこの問題について正面から取り上げて論じたのは劉懷玉「『西遊記』中的淮安方言」（『明清小說研究』第三輯・一九八六・中國文聯出版公司）ぐらいなものである。そこでは『西遊記』中の淮安方言として動詞、名詞、形容詞・副詞等三類に分けて合計五十五の用例を擧げて紹介している。これは一部分で全體を見ればもっと大量の淮安方言があると言う。だが通覽した所では、現代の淮安方言の知識に基いてはいるのだろうが、確實に現代の淮安方言であることの證明を欠いているし、さらに重要なことに、それらがほんとうに明の嘉靖萬曆間の淮安方言であったかについての證明手續きを全く欠いている。この程度の作業では『西遊記』の中に淮安方言が多用されている證明としては全く不十分であると言わざるを得ない。方言學の確かな手續きによってそれらが空間的にも時間的にも淮安方言であることが證明されるならば、吳承恩著者說の有力な證據になるだろう。しかしそれは言うは易しくして實際には殆んど不可能に近い。ちなみにまだこの論述をフォローした論文のあることさえ知らない。

そうした次第で作者に關しては吳承恩說が通行するけれども、その說の確實性は胡適の「跋銷釋眞空寶卷」（一九三一『國立北平圖書館館刊』第五卷第三號）を批判した俞平伯が「駁〝跋銷釋眞空寶卷〟」（一九三三『文學』第一卷第一號・上海・生活書店）でついでながらいみじくも述べた狀況からいまもって拔け出せないでいるように思われる。俞平伯「駁〝跋銷釋眞空寶卷〟」云、〔前略〕胡先生的前提既然根本不曾站穩、則其上的種種建築有何是處呢？他又信吳承恩是小說的作者、於是以吳氏的年代來推小說的、又以小說的年代來推寶卷的、這是錯中錯、小說固不足以推知寶卷、而『西遊』的作者至今是一時疑問。今之小說不一定是吳承恩做的。

吳氏作西遊記、根據『淮安府志』、志書上所謂『西遊記』、是不是這個『西遊記』呢？也難定。『西遊記』名同實

異者甚多、元代有吳昌齡的雜劇、有丘長春的紀行、明初有『永樂大典』所引「西遊記」、後來又有題作楊志和的『西遊記』本的「西遊記」、招牌既如此的多、何以見得這一次一定是了、而不再是冒牌呢？我們在吳承恩的集中、不見有曾作小說的痕跡（果然不一定要有痕跡的）我們在『西遊記』上不見題着吳氏的姓名、幷且也不見可考訂、可疑是他的筆名。現存的最古的版本是明刻世德堂、上寫着「華陽洞天主人校、」有誰說校訂者是吳承恩？（吳是江北人、華陽洞在江南。）這本上有壬辰（萬歷二十年、一五九二）秣陵陳元之序……

『西遊』一書不知其何人所出、或曰、出今天潢何侯王之國……、或曰出八公之徒、或曰出王自製。余覽其意、近跅跑滑稽之雄、巵言漫衍之爲也。舊有敍、余讀一過、亦不著其姓氏作者之名、豈嫌其丘里之言歟？……唐光祿既購是書、奇之、益俾好事者爲之訂校、秩其卷目梓之、凡二十卷、數十萬言有餘、而充敍於余。」

既說「秩其卷目梓之」、序首又題「刊『西遊記』序」、這大概是最初的刻本、胡跋假定爲出版約在一五八六、反早了些。惑之者、疑之也、或曰天潢、或曰其門客、詞雖呑吐、均非吳氏明甚。觀序文遇「天潢」「王」字均空行抬頭、又曰「今之天潢、」則作者約與序者同時、（吳氏已前卒十二年）雖原本不具姓名、序者也未必當眞完全不知道罷。若說姓吳的雖非「天潢」、却大可以做「八公」的、此固可通、奈拿不出證據來何？志上只說吳承恩做長興縣丞而已。總之、吳承恩作『西遊記』、備一說可、存疑則可、若以爲定論、須得再多一點的證據然後可。〔後略〕『燕郊集』一九三六年上海良友圖書公司本

4 『西遊記』全書次第、以至以東返成眞終

『大略』寫印本二三云、『西遊記』一百回、第一至第七回記石猴生于花果山、得道、大鬧天宮、以至被壓于五行山下之事。第八回記釋迦造經之事、與經言阿難結集不合。第九回記玄奘父母遇難及玄奘復仇之事、全非事實、甚誣古人。

第十第十一回記太宗入冥諸事、以爲因救龍爽約、與『朝野僉載』謂「因問殺太子建成齊王元吉事」者不同。第十二至十四回、記玄奘首途、至猴行者歸依之事。第十五回至九十九回、皆記入竺途中遇難之事、幷第九回之遇難以來共得八十一難。第一百回則東返成眞之事也。

『大略』鉛印本と『史略』の異同は、最初の「『西遊記』」三字が鉛印本にはないことのみである。

『小說舊聞鈔』「西遊記」云、(『茶香室叢鈔』十七) 宋周密『齊東野語』云、「有某郡倅、江行遇盜、殺之。其妻有色、盜脅之曰、「能從我乎?」妻曰、「吾事夫十年、僅有一兒、纔數月、吾欲浮之江中、庶有遺種、吾然後從汝。」盜許之。乃以黑漆圓盒盛此兒、藉以文褓、且置銀二片其旁、使隨流去。如是十餘年、盜至鄂艤舟、挾其妻入某寺設供、至一僧房、黑盒在焉。妻乘間問僧、「何從得此?」僧言、「某年月日得於水濱、有嬰兒白金在焉、吾收育之、今在此年長矣。」呼視之、酷肖其父。乃爲僧言始末。僧爲報尉、一掩獲之、遂取其子以歸。」按「西遊演義」述玄奘事、似本此也。

ここに引く周密の『齊東野語』の話は、清刊本『西遊記』の第九回の藍本であることを示すものである。楊至和本に玄奘の父母の遭難と玄奘の復讐の話がないから、これは吳承恩が附加したものだと言うのは、魯迅が執筆當時まだ明世德堂刊本を見ることができなかったためで、世德堂刊本にはこのことがない。もし世德堂刊本を吳承恩の原刊、あるいはそれに近い刊本だとするなら、世德堂本と楊至和本の先後に關りなく、第九回は吳承恩の加えたものではない。第九回の故事を加えたのは清に入ってからの『西遊證道書』以後の刊本で、『西遊證道書』は朱鼎臣の『唐三藏西遊釋厄傳』によって增入したと考えられる。世德堂本と朱鼎臣本の先後は明らかではないが、世德堂本は傳承される西遊故事から玄奘生誕復讐の故事を省いたのではないか。なお胡適が「西遊記考證」を書いた當時(一九二三・二・四)、すでに魯迅の『大略』鉛印本を見ていたかどうか微妙な所だが、すでに別の面から第九回が吳承恩の加えたものでな

いことを論じている。その第七章に「如果上文引的『納書楹曲譜』裏的『西遊記』是吳昌齡的原本、那麼、殷小姐忍辱復仇、唐太宗徵求取經人、等等故事由來已久、不是吳承恩新加入了。」と述べる。後になって『納書楹曲譜』に引かれた「殷小姐忍辱復仇」の故事は吳昌齡の原本ではなく、楊東萊『西遊記雜劇』の「撇子」「認子」兩套だと分る（孫楷第「吳昌齡與雜劇西遊記」）のだが、吳昌齡、楊東萊に關せず、この故事は由來久しいのである。『史略』の記述は訂正されなければならない。

なお『史略』の記述は言及しないが、『西遊記』末卷（世德堂本では第九十八回）では玄奘が東土に將來した經卷について述べられている。それに關する魯迅の意見があるので附け加えておく。

『小說舊聞鈔』「西遊記」云、

（**『等不等觀雜錄』**四「大藏總經目錄辨」）嘗見行脚禪和佩帶小摺經目、奉爲法寶、閲其名目卷數、與藏內多不相符、欲究其根源而未得也。一日檢『西遊記』、見有唐僧取經目次、即此摺所由來矣。按『西遊記』係邱長春借唐僧取經名相、演道家修煉內丹之術、其於經卷數目、不過借以表五千四十八黃道耳、所以任意摭拾、全未考核也。乃後人不察、以此爲實、居然鈔出刊行、廣宣流布、雖禪林修士、亦莫辨其眞偽、良可浩歎。

（又「一藏數目辨」）今時僧俗持誦經咒、動稱一藏。問其數、則云、五千四十八也。嘗考歷代藏經目錄、惟『開元釋敎錄』有五千四十八卷之數、餘則增減不等、至今乃有七千二百餘卷矣。世俗執著五千四十八者、乃依『西遊記』之說耳。……

案：『少室山房筆叢』（四十七）云、「大藏經四千五十餘卷、而諸家書目所載僅百數十種、蓋唱偈疏懺等、於文義相遠、不得盡收也。然以西天經總較之、直百之一耳。因錄此廣異聞。不必論其有無。

涅槃經四千八百卷、四十卷在唐。菩薩經一部二千一百卷、三十六卷在唐。虛空藏經一部四百卷、二卷在唐。首楞嚴經一部一百一十卷、十卷在唐。恩意經大集一部五十卷、四卷在唐。決定經一部一百四十卷、四卷在唐。寶藏經一部一百四十卷、二卷在唐。華嚴經一部二萬三千卷、八十一卷在唐。李眞經一部九十卷、三卷在唐。大般若經一部一千六百卷、六卷在唐。金光明品經一部一千卷、十卷在唐。未曾有經一部一千五百卷、五十卷在唐。維摩經一部一百七十卷、三卷在唐。三論別經一部二百七十卷、十二卷在唐。金剛經一部一百卷、一卷在唐。正法輪經一部一百二十卷、二卷在唐。佛本行經一部一千八百卷、六十卷在唐。五龍經一部三十二卷、二卷在唐。菩薩戒經一部一百十六卷在唐。大集經一部一千二百卷、三卷在唐。摩竭經一部三百五十卷、四十卷在唐。法華經一部一百卷、七卷在唐。瑜珈經一部一百卷、三卷在唐。寶常經一部一千卷、七十卷在唐。西天論經一部三千三百卷、三卷在唐。僧祇經一部五百七十卷、十卷在唐。西天佛國雜經一部九千五百卷、三十卷在唐。起信論經一部二千卷、五十卷在唐。大智度經一部一百八十卷、十卷在唐。寶藏經一部四千五百二十卷、一百四十卷在唐。本閣經一部八百五十卷、二十卷在唐。正律文經一部二千卷、十卷在唐。因名論經一部二千二百卷、五十卷在唐。唯識論經一部一百卷、十卷在唐。具舍論經一部二千卷、十卷在唐。」

『西遊記』第九十八回玄奘從西天持歸經目與此同、惟『李眞經』作『禮眞如經』、『因名論經』作『大孔雀經』。又多增益在唐之一卷爲十卷、共五千零四十八卷、以合『開元釋敎錄』之數而已。因疑明代原有此等荒唐經目、流行世間、即胡氏『筆叢』所鈔、亦即『西遊記』所本、初非『西遊』廣行之後、世俗始據以鈔撰此目也。

（待續）